

序に代えて

——佐藤秀山君への手紙——

今年八月九日の日記を、わたしは次のように書き出している。

夕刻、観光ホテルあいおい（原爆ドーム東脇）に、佐藤秀山・榎野譲・三宅慎二の三君（共に昭和二十四年広島師範卒）と会す。彼らの招待なり……

現在小学校校長の要職にある三人であるが、君らの師範在学中から数えると、ほぼ四十年ぶりに、四人水入らずで顔を合わせたことになる。原爆による焼失は免れたとはいえ、まだ爆風による被災の後の生々しい木造校舎の一室が、国語と英語の兼用研究室に当てられ、そこに出入りしていた頃のまだ少年の眼差しが残る君たちの顔が、今でもまざまざと蘇ってくる。師範学校から、新制広島大学の一環としての東雲分校へ移行するあの一時期は、わたしにとっても、戦後再生の歩

みを始めた時期でもあったので、忘れようとして忘れることは出来ない。その頃に出会った学生たちとの心のつながりも絶える時はあるまい。

あの夜、齢六十に近い君たちが、交々語ってくれた卒業以来の経験談に、わたしは終始感深く聴き入った。そのあとわたしも、東雲時代から今日に至るまでのあらましと、現在の心境とを聞いてもらった。君も覚えているだろう。四人一致した結論が、社会も家庭も学校も、共に絶望的混沌の中にあるが、中・高生のなかには、いや小学生のなかにも、大人を寄せつけない、新たな可能性の芽生えを見せている者がいる、その芽を発見し、大事に育てて行こう、という所に至ったことを。

雑談に入ってから、わたしが、今月二十日、越後の良寛遺跡を巡る旅に出る、というと、君は、一緒に行きたいなあ、と言った。この『冬のうた春のうた』の歌稿を読んでいると、「若き日に」の中にある、次の歌が目にとまった。

良寛を説く師の君はきびしくて稚ければ吾ら親しまざりけり

西本願寺派の宝泉寺に人と為った君が、少年の客気を見せた詠として興深いものがあつた。しかし、「春になれば」に入る次の二首には、その後幾山河の人生を経てきた人の、率直な良寛への傾情がうかがえる。

雪深きところに生まれし良寛は海光る玉島を好き給うらむ

永き春の日を楽しみし良寛に淋しき淋しき冬の歌ありてありがたきかな

わたしと一緒に良寛の旅をしたいと言った君の心に、かつての日の「師の君」の言葉が、光りの如く蘇ってきたのかも知れない。

多種多様の題材によって、日記をつけるように詠みためてきた歌の集録を通読して、君の日常生活の息吹きがそのまま伝わってくるもの、長男健君の死に際しての慟哭の歌を初めとする肉親への慈しみの情の溢れるものなど、心に残る佳作が多いが、やはり教師としての君の本領は、小学校の子どもたちと共にある時おのずからに口をついて出る即興歌に、最もよく発揮されているとせねばなるまい。例えば次のような歌をあげてもよい。

幸うすき女の子二人家出せり 夜の職員室に電話待ち居り

「ボク ナニヲ ハイテルカ ワカル？」よしのぶが母の縫いくれし吊ズボンを見せにくる
圭子さんが来て「きょうはわたしの誕生日よ」という「八歳になりしか」といえば「九歳になりし」という

ぜんそくの子も母に去られし子もおのがじし生き甲斐を求めて今日も来にしか

非行というも問題行動というも適切ならず愚行と呼んではという説に吾れもうなずく

さびしければ絵を描きに行く子どもらのおと追いかけて海を見にゆく

登校を拒む子明日は訪ねゆかん人を信ずる心よみがえればや

書きあげれば切りがない。

自己を教育する力が大切という二十一世紀を担う子ら巢立ちゆく

「いう」のは、校長か卒業してゆく子らか、どっちの口から出てもよいのではないか。そういう校長と子どもらの間柄ができているのだ。

麻雀もゴルフも囲碁も知らずして子らにかかわり過ぎて来にしか

ふと秀山校長の胸をよぎる感慨、わたしも君と同じような人生を歩んできたことを改めて思う。嘘も偽りもなくそう思う。それでよいのではないか。

(昭和六一・一二)